論文種別：原著論文

表題：剣武術の誕生：武術興行からみる武道の中心と周縁

The birth of Kenbujutsu: The center and periphery of Budo from the perspective of martial arts entertainment

著者名：田邊 元 TANABE Gen

所属先：富山大学芸術文化学系 Faculty of Art and Design, University of Toyama

所属先住所：〒933-8588 富山県高岡市二上町 180 番地
180 Futagamimachi, Takaoka, Toyama 933-8588

キーワード：芸能武術, 剣舞, 日比野雷風, 「見る/見られる」関係, 視線

Key word : Entertainment Martial arts, Kenbu, Hibino Raifu, Relationship of Seeing and Being Seen, gaze

ランニングタイトル： 剣武術の誕生

連絡先担当者：田邊 元 tanabe@tad.u-toyama.ac.jp

This paper aims to clarify some of the diverse martial arts practices during the same period by identifying martial arts entertainment that took place mainly during the Meiji era. It follows the activities of Shinto-ryu Kenbujutsu, which was founded by Hibino Raifu in the middle of the Meiji period and included performances in its practice. This paper considers the martial arts practiced in martial arts performances were analyzed from the perspective of their performing character. The performing character refers to the nature of martial arts as practiced in a "see/be seen" relationship. How was the martial art practiced in such a relationship? It be examined how Hibino practiced martial arts entertainment while being aware of the gaze of the people.

Chapter 2 detailed description of Hibino's life. What made Hibino different from other martial artists was that he had connections with people on the regime side, such as soldiers, politicians, and scholars, although his origins are unknown. Throughout the Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War, he was supported by many people, and his performances were attended by military and political figures. He actively presented the martial arts to such audiences, including those on the regime side, in the form of entertainment.

Chapter 3 clarified the specific details of the practice of Shinto-ryu. Shinto-ryu included sword dance, which had been practiced by swaggerer and recognized by the public as a dance performed by female geisha. Hibino said that Kenbujyutsu and sword dance were different, and that sword fighting was positioned as an extension of "martial arts training," and that through its practice, it showed "the reality and activity of the Yamato spirit". To be more specific, the demonstration was so fierce that the swords broke, and the audience felt as if they were watching a duel, and even cried. Of course, the audience included soldiers and politicians as mentioned earlier. In other words, Hibino's martial arts performances was satisfied the masses and could withstand the gaze of soldiers and politicians.

As mentioned above, although the martial arts could be perceived as "violent" in the new era, Hibino adapted to the times by actively presenting a performance that met the gaze of the audience.

I はじめに

本稿は、明治期を中心に行われた武術興行の実践を明らかにしていくことで、同時期における多様な武術実践の一端を明らかにするものである。具体的には、明治期中頃に日比野雷風という人物により創始され、その実践に武術興行を含みこんでいた神刀流剣武術の活動を追う。

これまで日本の武術興行については武道史において関心が示されてきた。例えば、文明開化と共に登場した武術興行の一つである撃剣興行について、武道史では新時代とともに武術で食えなくなっていく武士、のちの士族たちが食い扶持を得るための手段として実践され始めたこと、興行として試合を行うことでルールが成立し、結果としてスポーツ化への道が開かれたことが指摘される（中村, 1994; 魚住, 2021）。また、当初は一流の武術家たちが登場し鎧を削っていたが、西南戦争を経た上での警察組織再編成による武術家たちの引抜きがあり、結果として撃剣興行自体の質が低下し低迷したことが指摘される。他方で撃剣興行の形式は、自由民権運動の激化と共に、そこに参加する人々の実践の一つとして取り入れられた（長谷川, 1977; 湯浅, 2000）。後述するように彼らは時として粗暴な振舞いをしていった。中嶋は、自由民権運動に参加する人々、すなわち壮士自身の持つイメージの悪さから、撃剣興行やその実践である武術に対して「低俗なイメージ」がもたれるようになったことを指摘する。こういった「低俗なイメージ」の払拭が、のちに誕生する日本における武術の最大組織である大日本武徳会（以下「武徳会」とする）の課題であり、武徳会を中心に主張される「武道」概念は、当時の武術にあった「低俗なイメージ」の払拭が目指されたという（中嶋, 2017, pp.32-42.）。

ところで、これらの先行研究は自由民権運動期が下火となる 1880 年代後半以降、武術興行がどのように実践されたかについては検討していない。中嶋によれば、武徳会は 1900 年代に撃剣興行を行った会員を除名し、会員が実践することを禁じ、武術の実践のされ方や、それを観る者の態度まで問題視するようになる（中嶋, 2017, pp.32-42.; pp.122-154.）。しかし、中嶋も他の先行研究同様に「帝国憲法発布以降になると、撃剣興行及びその他の武術の興行も人気なくなり、ほとんどが廃業」（中嶋, 2017, p.41.）したとし、同時代における武術興行の実践がどのようなものであったのかは未検討である。他方で、池本（2014）や木本（2018）の研究はのちにボクシングへとつながっていく柔拳興行を扱うが、興行という形式で実践される武術が同時代に存在し続けており、自由民権運動以降も武術興行で生計を立てる人々や、観戦していた人々が存在していたことを示している。

周知のとおり、武術は明治維新を迎え近代という時代に適合していく中で、武道という名称のもと精神修養的な側面を前景化し、学校教育や警察を実践の場として今日的な姿を形成していった。そのため、日本における武術の研究の多くも、近代における武道の形成過程に注目したものが多く（井上, 2004; 寒川, 2014; 中嶋, 2017）。しかし、日本の武術文化を考える際に、そういった中心的に扱われるもののみをみていくので良いのかどうかは検討する必要があるだろう。例えば田邊による一連の研究は、個々の地域社会における武術実践のあり方を示す。それらは同時代に実践されながらも、武徳会や学校教育といった場における武道のあり方とはまったく違った文脈にあり、実践者たちの生活と関わる中で多様に存在していたことを示している（田邊, 2013; 2017; 2020）。本稿において武術興行に着目することもまた、そういった多様な武術実践のあり方を明らかにしていくことで、先行研究のもつ認識自体を問い直していくことになる。

本稿では、人類学者である山口昌男による「文化の中心と周縁」論の立場を援用しながら、「周縁」に位置づくとなしめる武術の実践を描くことで、そういった認識の相対化を目指したい。山口は、文化における「中心」は「「徴づけ」られたものを排除した残りの部分からなっている」ことを指摘する（山口, 2000, p.151.）。「排除」とはすなわち、境界を明確化する、もしくは「秩序」づける行為と呼べるが、中嶋が指摘した武徳会における会員の除名は、まさに武徳会を秩序づける出来事といえる。後述するように、武徳会を牽引し武道概念を提唱する武徳会副会長の西久保弘道（以下「西久保」とする）は、武術を観る側の態度を批判することで武道のあり方を示すが、まさに「「徴づけ」られたものを排除した残りの部分」から武道概念は成立している。同時に、山口は「徴づけ」された「周縁」の存在は「絶え間なく「秩序」に脅威を与え」、「周縁」の位置にとどまり「自ら否定項となることによって、文化の中心を生気づける」ことも指摘する（山口, 2013, p.537.）。つまり、具体的な「否定項」として武術興行が存在することによって、武道のあり方が主張でき、結果として「中心」として武道概念に基づく武術のあるべき姿が示されたといえる。本稿において武術興行を取り上げることは、多様に存在していた武術実践から、改めて今日の武道のあり方を考える際の材料を提供することにもなるだろう。

では、武道概念が主張される時代の武術興行とは、いったいどのような実践であったのだろうか。

1. 興行に向けられた「視線」

ところで、興行という形式で行われることは何を意味するのか。それは、観客を伴うことで「見る/見られる」という関係性の中で実践されるということである。明治初期には実力者たちが集っていた撃剣興行も、警察での撃剣需要を背景とした実力者の引抜きがあり、出演者たちが徐々に二流三流となっていく。そのためパフォーマンスに傾倒し、撃剣興行は人気が失われていった（中村, 1994, p.164.）。「見る/見られる」関係は、「第三者の視線」を意識させることで実践を変容させていく。前述したように西久保は、当時の武術について「芝居か角力でも見る積りで見て居る、そればかりでなく、稽古をする其の人も、芝居でもする積りで、見世物の如くに考へて居る」（西久保, 1912, p.13.）ことを批判し、武術の持つ「見世物」的、「余興」的、もしくは「興行的」な性格を否定した。田邊は、西久保が否定したそのような性格を「見る/見られる」関係のもとに生まれる「芸能的性格」とし、そのような性格を備える武術を分析する視点として「芸能武術」概念を提示する（田邊, 2013）。芸能武術論は、民俗芸能として実践される武術を対象とした分析概念として提示されるが、芸能的性格はより広く、「見る/見られる」関係のもとで実践される武術を論じる際にも有効な視点と考える。武術が興行として舞台の上で行われるとき、まさにこの芸能的性格を前景化させ実践される。

では、明治時代の武術興行にはどのような「視線」が向けられていたのか。湯浅によれば、民権運動期に主として壮士たちにより行われた「運動会・演説会・懇親会」では、撃剣を前座などに行い会場の緊張感を高めていたというが、そのような雰囲気があったために体制側から密偵が送られ、反政府的思想に対する監視が行われていた。しかし、そのような中でも「官憲に対する反抗を露骨に表現するパフォーマンス」も行い、さらに壮士育成のための武術訓練も行っていた（湯浅, 2000, pp.1-6.）。つまり、民権運動を通じて人々が集まりその前で撃剣などの武術が行われるという状況は、少なからず危険視されるような状況が生まれていたといえる。また、民権運動が終結したからといって壮士たちが消えたわけではなく、国会開設に伴う選挙戦をはじめ、院外団として政党の下部組織として壮士たちが編入されたように、彼ら、そして彼らの持つ「暴力」は依然として人々の近くに存在し続けており、その暴力的な活動は残っていた（エイコ, 2020）。危険視する「視線」は 1890 年代以降も存在していた。

その他の興行にむけられた「視線」からも考えたい。壮士たちが視線の中で実践したのは武術だけではない。「新派劇」を牽引した川上音二郎（以下「川上」と略す）をはじめ、自由党の壮士たちは、反政府的な演説集会の取り締まりが厳しくなる 1880 年代から、政府公

認の「遊芸稼人の鑑札」を所得し講談師、落語家、演歌師などの芸人となり活動した。鑑札の所得は総裁板垣退助も勧めていたといい、彼らは芸人になり「政治的弾圧を回避しつつも、政治的宣伝活動を継続し、さらに収入の確保をも可能に」した（中野, 2020, pp.302-305.）。加藤は、「見世物」の「重要なポイント」として「道徳性と娯楽性が渾然一体となって融合している」ことを指摘する（加藤, 1965, p.21.）。その上で、川上の演説や演劇のあり方を「広場の芸術」と称し、「広場の民衆に接近するための、かつ、官憲の眼をゴマ化することのできるアイマイ性を確保するための、視聴覚形式を採用した」と指摘する（加藤, 1965, p.59.）。加藤の指摘は、文化人類学や民俗学において、「まれびと」や「異人」、「トリックスター」といった、祭礼空間に登場しパフォーマンスを通して秩序や祝祭的空間を生み出す両義的存在にも通じる（赤坂, 1985; 小松, 1985; 山口, 2000）。加藤がいう「視聴覚形式」は、パフォーマンスという多様な情報を持った形で提示されるため曖昧で、それゆえに観る側の受取り方により、受容されることも排除されることもある両義的な領域といえる。武術興行もまた実践を通して曖昧な情報を提示しているために、体制側の監視や大衆の求める娯楽への期待、他の武術家のまなざし等、様々な「視線」の中で実践されていたはずだ。

以上を踏まえれば、興行という場には「見る/見られる」関係が生まれる故に様々な「視線」が存在しており、そのためにその社会のあり方に沿いつつ実践する必要があったといえる。それを積極的に行っていたのが、本稿において対象とする日比野雷風（以下「日比野」と略す）という人物と、彼の創始した神刀流剣武術の実践者たちである。神刀流は東京を拠点に活動していたが、1890年代半ばには「全国九ヶ所にその道場を開き、既に三千余人の門弟を養うに至れり」（東京日日新聞, 1895）と新聞報道される程に流行していた。のちにみていくように、日比野の神刀流剣武術は武術興行を実践に含んでおり、そのために芸能的性格をもっていた。そして、その実践は軍人、政治家、学者、宗教家から民衆まで支持を集めた。ここで注目されるのは、民衆だけではなく体制側と考えられる軍人や政治家からも支持を得ている点である。つまり、彼らの「視線」に適う必要性があったということを意味する。

2. 明治時代と剣舞

本稿で対象とする神刀流は、今日では一般に「剣舞」と呼ばれ実践されるものの一つである（以下「剣舞」と表記する）。剣舞実践者の間では、神刀流は今日行われる剣舞流派の多くを生み出した源流と目され、現在の剣舞の土台を築いたとされる（大野, 1976,

pp.14-21：鈎, 2020, p.22.)。日比野は 1890 年頃に剣舞を実践に含む神刀流を創始し、当時世間で行われていた剣舞と差別化を図るために「剣舞術」、のちに「剣武術」の名称を自身の実践に充て活動した^{注1)}。

ところで、剣舞とはどのようなものか。明治時代には、東京の浅草や大阪の千日前のような盛り場において、「娘剣舞」や壮士による「改良剣舞」とよばれる興行が行われていたことが知られるが、「ただドンチャンの鳴り物入りにて踊り、ときどき詩吟を加えるだけ」のものであったという（平出, 1975, p.244.：石井, 1997, p.273.）。一方で、今日の剣舞実践者らによれば、剣舞の起源とは「江戸末期に昌平坂学問所の学生が酒に酔って漢詩を吟じつつ刀を」（鈎, 2020, p.20.）抜いて行っていたものがあり、それが 1874 年から榊原鍵吉により始められた撃剣興行において試合と試合の合間に余興として行われた。そこから剣舞流派を創始する人物が登場し拮がったという（大野, 1976, pp.6-13.）。剣舞の起源については、剣道史家である中村も似た見解を示しており、撃剣興行において剣舞が行われ、「余興の部分は余興の部分として、剣舞が分化独立して舞台芸術にまでなって」（中村, 1994, p.156.）いったと指摘している^{注2)}。

一方で、木村によれば民権運動が巻き起こる中で、壮士の「壮士の実践」の一つとして行われていたのが剣舞であるという（木村, 1998, pp.42-50.）。壮士は、「悲憤慷慨」して漢詩を読み書きし、暴力的行為や「運動会」を通じた身体実践を行うことで壮士として認識されたが、そのような身体実践の一つに剣舞があった。剣舞とは、懇親会や酒宴において「悲憤慷慨の演説、憂世慨事の談論の合間に」詩吟に合わせて刀を手に取り舞うものを指した。壮士たちが剣舞をなぜ始めたのかは不明ながら、明治中頃には壮士向けの剣舞マニュアル本が多く発行されており、それらを読むことにより壮士的な身体実践を得ることが出来たという（木村, 1998, pp.94-98）。このように明治期に壮士たちにより受容されたという剣舞であるが、しかしその実践は「悲憤慷慨」するような壮士の実践に留まるものなのだろうか。先にみたとおり今日の剣舞について、実践者たちや剣道史家はその発生を撃剣興行にみており、壮士による壮士の実践との関わりは見出されていない。また「娘剣舞」や「改良剣舞」という実践と、これらの剣舞の関わりもはっきりとしない。しかし、刀を手に漢詩を吟じ舞うという実践自体は共通である。そのような剣舞と「舞台芸術」となった日比野による剣武術とは同様のものであったのだろうか。

以上を踏まえ、あらためて日比野の武術興行とはいったいどのような実践であったのか。本稿では日比野と神刀流剣武術に注目し、その実践について新聞史料や、日比野の家

族や弟子らによる文書などを中心に構築することで考察を進めていく。日比野に関する新聞報道は 1890 年代中頃以降からかなりの数を確認することが出来、これらを使用して日比野と神刀流剣武術の実践を描く。今日の剣舞実践者らによる日比野像は、日比野の息子である日比野正明（以下「正明」と略す。ただし、著書については「日比野」の表記を用いる）による著作に寄るところが大きい。ただし、その内容は批判的に検討する必要がある。日比野自身について書かれた各資料の概略を示す。まずは、1912 年に古林亀治郎により編さんされた『現代人名辞典』に記述が存在する（古林, 1912, pp.725-726.）。また、正明による文献（日比野, 1932）、それに加筆された増補改訂版（日比野, 1936）、日比野の弟子であり二世日比野雷風を名乗った内藤正光（以下「内藤」と略す）による文献（内藤, 1930）にも日比野についての記述がみられる^{注 3)}。正明の著作は日比野から聞いた話や日比野自身が執筆した文書をまとめたものであるが、記述の整合性が取れない部分もみられ、脚色とみられる部分も多い。ただし、日比野について生い立ちからもっとも詳細に記述されており、加えて日比野を支持した人々からの手紙、写真、日比野の娘や弟子による懐古なども掲載されており、その情報は貴重である。また吟詠家の大野は、日比野の来歴について日比野（1932）の説に加えて、日比野の弟子や、日比野と同時代に剣舞流派を創始した人物やその弟子たちから聞いた説をも記している（大野, 1976）。こちらも内容の一部に明らかな間違いがあるため、検討しながら参照したい。以上を用いて、日比野と神刀流剣武術の実践を描きたい。

II 日比野雷風の生涯

本章では、本稿の対象とする日比野がどのような人物であったのかを描く。日比野は自身のいずれの著作においても、その経歴について自ら語ることがない。特に神刀流創始以前の時期、すなわち幼少期から 30 代前半くらいまでの経歴ははっきりとしない。以下、史資料から日比野の生涯を再構築し、その人物像を探っていく。

1. 幼少期から神刀流創始まで

古林によると、日比野は「神刀流剣武術の開祖」であり、「明治三十六年以来日本内地は固より満朝地方に迄周遊を試み、今や其の名天下に」知られる人物であるという。日比野は、「本名正吉元治元年を以て鹿児島千石町に」生まれ、「三歳の時厳君に従て上京」した。幼少期より「武術に志し造詣する所」があり「十六歳の時道場を本郷弓町」に開き、

さらに「湯島天神町」に道場を開く。1894年に「神田柳原河岸」に移転、同年には「駒込千駄木町」に出張所も開く。その後「益々発展して方今出張所の数三十余ヶ所」に至るといふ。また、「朝野貴顕紳士の賛助を得て小石川区柳町に神刀流の本部を設」けた（古林, 1912, p.725.）。

また正明によれば、日比野は1864年8月27日生まれであり、「島津藩に仕へし刀鍛冶師日比野源道義の長男」であるという（日比野, 1932, p.1.）。父子は日比野が3歳の頃に東京に辿りつくも、すぐに生活苦から「埼玉県北足立郡領家村に住む」行商人に日比野を預けた。その後、日比野は11歳の頃に上京し書生となり、その時に偶然剣術の稽古を見る機会があり、独学で練習を始める。13歳で書生を辞めて、15歳の頃には現在の熊谷市周辺で「剣道」を教え「其土地では引けを取らぬ剣客者」となり道場を持つ。しかし、紆余曲折があり道場は閉鎖され東京に戻った。東京では「剣術大安売一試合一銭」という商売を行っていたが、その話を聞いた浅草の「北清島町の報恩寺」の住職から「剣道教師」となって欲しいと頼まれ、16歳の時に「天神下の間口二間奥行五間の道場の主」となった。その後、日比野は武者修行などしつつ道場経営をし、1889年、25歳の時に神刀流を創始するに至った（日比野, 1932, pp.1-42.）。

一方で、日比野の内弟子であり神刀流免許皆伝であった柳沢義正（以下「柳沢」と略す）によれば、日比野は13歳の頃に父に連れられて熊谷に現れ、近隣の富豪「根岸伴七郎」宅で「新陰流」の剣術を、また柳沢の祖父から詩吟の「義太夫調」と舞を、それぞれ習得した（大野, 1976, p.75.）。16歳の頃に「新陰流」の「初伝目録」となり、17歳の時に東京へ進出し「剣術大安売一試合一銭」の商売を始めた。18歳の時に、「湯島天神の近くに鳶屋という質屋」がありそこの倉庫を提供してもらい道場とし、柳沢の祖父の案で「神刀流」と命名した。その後、21歳の時に「神田柳原二十二号地に小林ライオン齒磨」の土地があり、社長の小林富次郎から倉庫を提供してもらい道場としたという（大野, 1976, pp.76-77.）。他方、日比野の弟子である清水正寅の話では、日比野は16歳の頃に東京に出てきて、政治家中島行孝の書生となった。その際に「剣道」の飛入り試合に参加する中で技術を身に付け、19歳の時に「湯島天神下」に道場を設け、次に「柳原」に道場を開いた。この道場が「ライオン齒磨社長小林富次郎氏の隣」にあり、彼が政治家鳩山和夫を紹介し縁が生まれたという（大野, 1976, pp.77-80.）^{注4}。

このように、日比野が生誕してから神刀流を創始する前後である30歳あたりまでの来歴は、語られ方によって様々である。鹿児島生まれであり、幼少期を熊谷市近辺で過ごし

たことは共通しており、10代には誰かしらのもとで書生を経験した。身に付けていた武術については詳細が不明ながら、「剣道」と語られることや後述するように日比野が「撃剣家」とされることから、防具を身に付けて試合を行う形式のものであったことが伺われる。また10代半ばで道場を持ち、欧化主義者たちから「旧弊」とされた武術の道場を次々に開くような、新時代を生き抜く力を持っていたことも間違いない。そして、政治家や有力者とのつながりによる後援を得ていたことも伺われる。それらの後援を得られるだけのつながりが、どのように生まれたのかははっきりとはしないものの、パイプが10～20代には生まれていたようだ。実際、小林富次郎や鳩山和夫、また後述する漢文学者重野安繹（以下「重野」と略す）、そして最大の支援者となる元帥海軍大将東郷平八郎（以下「東郷」と略す）と言論家徳富蘇峰（以下「徳富」と略す）などの「紳士」たちは、日比野の支持者として彼の活動に対して支援を行う。そのような支援を得られた背景には、日比野が壮士的な活動をしていた可能性も十分に考えられる。1904年生まれの文学評論家である神崎清は、日比野の道場であった「神刀館」を「そのころ（1885年前後）大量的に発生した壮士グループ」（括弧内は著者による補足）の一つと見做す（横山, 1967, p.398.）。また湯浅は、神崎の指摘と1891年に書かれた日比野による著書を踏まえて、日比野の剣舞実践や神刀館を民権運動における壮士活動の一つと見做している（湯浅, 2003, p.430.）。神崎や湯浅は、日比野が実際に壮士として活動していたかを検討していないためにその実際は分からない。後述するように、日比野の神刀館には多くの子どもが入門しており、そのことから神刀館全体が壮士グループであったとは考えにくい。しかし、神刀館に壮士が出入りしていたことが新聞記事にもみられることから（東京朝日新聞, 1894）^{注5}、何かしら関与していた可能性も考えられる。

いずれにせよ、日比野は「紳士」と何かしらのつながりを持ち、この時代に築いた人脈が日比野と神刀流を支えることになったことは間違いない。また人脈だけに限らず、書生として生活していた時に神刀流の柱となる剣舞や漢詩に触れていたようで、書生という東京に出てきた当時の若者たちが取る一つの生き方が、神刀流を生み出すきっかけとなったといえるだろう。身分制度が崩壊し、学歴を持つようなエリートでもない日比野は、このような背景の中で神刀流剣武術の創始を行った。

2. 神刀流創始後から晩年

神刀流創始直後に日比野がどのような活動をしていたのかは分からないが、1895年以

降、彼の活動は新聞紙上に登場するようになる。例えば 1895 年 8 月 19 日には、「神刀流撃剣家日比野氏」が神田柳原に道場を新設したことが書かれる（読売新聞, 1895）。また、同年 8 月 18 日には、道場新設の理由として「日清戦争以来国民の尚武心とみに増発し」たためであり、「全国に九ヶ所にその道場を開き、既に三千余人の門弟」がいるとある（東京日日新聞, 1895）。「三千余人の門弟」は誇張かもしれないが、「出張所の数三十余ヶ所」（古林, 1912, p.725.）とあることも踏まえると、1895 年前後には日比野の道場が世に知られていた様子が伺われる。また日比野は道場経営をしつつ、武術家として他の武術家たちと共に活動をしている。例えば 1895 年 9 月 20 日には、「大日本武術講習会」が「芝公園内弥生会館内」に道場を設置した旨が書かれるが、そこには他流の武術家らと共に「日本神刀流日比野正義」の名が並ぶ（東京朝日新聞, 1895b）。また、1896 年 11 月 13 日に「日清戦争第三年祭記念」として「剣客奈良某」が「上野公園桜ヶ丘において府下の剣客」を集め、「撃剣、剣舞その他種々の余興を催した」が、そこにも門弟らと参加している。この際、日比野一門以外の剣客らが剣舞を行ったが観客に不興であった。その後、日比野や一門が剣舞を行ったところ「勇壮なる剣舞を演ずるや、ヒヤ／＼妙々の賞声四方に起り、観覧人をして殆んど聳せしむる程」大好評であったという（都新聞, 1896）。日比野らの剣舞は他の武術家が行う剣舞よりも卓越しており人気もあったようだ。

そして、日比野はこのような武術興行を自身でも開催するようになる。本稿ではこの武術興行を「撃剣剣舞大会」と呼称する。撃剣剣舞大会には単発のものと、大会回数が冠される定期開催のものがあり、後者は各新聞記事から推定すると年 2 回の開催ペースで行われていたようである。撃剣剣舞大会がいつから行われていたのかは不明であるが、1898 年 4 月 17 日に上野公園で「神刀流剣舞第四回大演習を興行する」とあることから、1895 年前後から始められたことが推測される（東京朝日新聞, 1898）。日比野は、この撃剣剣舞大会のほとんどを神田にある「錦輝館」で開催しているが、例えば 1897 年 5 月 2 日に行われた撃剣剣舞大会には「門人にて関東及び東北地方に散在するもの数千人相会するよし。同日は陸海軍の将校及び朝野の紳士参場する趣き」とあるように、多くの観客と「陸海軍の将校及び朝野の紳士」が参加していた（東京朝日新聞, 1897；都新聞, 1897）。また、同様に 1898 年 11 月 20 日に行われた第五回大会も「陸海軍の将校及び朝野の紳士」や多くの観客を伴い行われ、その様子は安達吟光により描かれている。（※図 1 挿入）

このように撃剣剣舞大会の在り方には、他の武術興行と異なる点がある。それは、軍人や政治家といった「紳士」たちが観客として多く参加していることである。先述のよう

に、日比野は 10～20 代に「紳士」たちとのつながりを築いていたが、その「紳士」たちを年 2 回ペースで行っていた撃剣剣舞大会に招いていた。そして、「紳士」たちは積極的に日比野と神刀流を支援した。「建設の意気旺んなりし明治の時代」だったために「全国に知られ」た神刀流は、1900 年に「伊藤元帥、鳩山和夫氏、大隈伯、野津大将、大倉喜八郎氏、先代小林富次郎氏の賛助御後援により神田より小石川の柳町に道場を」（日比野, 1932, pp.42-43.）移すことになる（東京朝日新聞, 1900a；東京朝日新聞, 1901a）。

日比野は、1902 年にその名乗りを本名である正吉から「雷風」と改めた（東京朝日新聞, 1902b；読売新聞, 1902）。この時期、日比野は「紳士」たちに直接的にも間接的にも協力するような活動を行っている。特に、日露戦争の前後にあたる 1900 年代前半には、戦争を支持する形をとった活動の報道が目立つ。例えば、1900 年 11 月 23 日に錦輝館で「家弓熊吉氏の薩摩琵琶等」と共に 3 日間行った「剣舞会」は、「恤兵義金募集の剣舞会」として行っている（東京朝日新聞, 1900b）。また、1904 年 2 月から開戦された日露戦争時にも、日比野は「抜刀隊を組織して従軍」しようと「出願したるも許可」されなかったため、自身の財産を「日本銀行へ差出して買上を求め之にて国債を引受」けることで積極的な支持を行っている（東京朝日新聞, 1904b）^{注 6)}。加えて、10 月 15 日には「遼陽戦勝記念として長さ二間巾三尺」の額に「皇軍萬歳」と書き靖国神社に奉納し、「納額式」を兼ねた剣舞術と撃剣を行ってもいる（東京朝日新聞, 1904c）。日比野はしばしば「全国の師団学校」に赴き演武を行い（東京朝日新聞, 1903；東京朝日新聞, 1904a；日比野, 1932, pp.43-49.）、またそのような遠征時には都市部において「剣舞会」を開催しそこに軍人を招くこともしており（東京朝日新聞, 1902b；大阪毎日新聞, 1903）、「目下軍人社会に持て囃されつつある」と新聞上に紹介されるほどであった（東京朝日新聞, 1902a）。大野によれば「日露戦争後、剣舞は大流行で戦勝祝賀会の後には必ずといってよい位、剣舞が行われ、おおよそ剣舞家と名のつく者は引っ張りダコの有様であったが神刀流はその中心的存在であった」（大野, 1976, p.81.）が^{注 7)}、時勢を捉え「軍人社会に持て囃され」た日比野と神刀流は 1900 年前半に「紳士」たち、特に軍人たちを中心に基盤を築くことでその活動を拡大していった。

また、日比野の支援者の一人である徳富との強い関係が築かれたのも同じ時期である。それは、徳富が代表を務める国民新聞社が襲撃を受けた日比谷焼打事件をきっかけとしたものであった。日比谷焼打事件は、1905 年 9 月 5 日にポーツマス条約に関連する、日比谷公園で開催されるはずだった集会に集った民衆がその勢いで暴徒化し、政府を支持する

政治家やメディアを襲撃したものである。この時に政府支持の「御用新聞」と見做された国民新聞社も襲撃を受けた（藤野, 2015, pp.35-40.）。この事件については各新聞社が翌日に報道を行っているが、その記事に日比野が登場する。彼の“活躍”については新聞社ごとに違いがあり、好意的なものとはそうではないものがあるが、ほとんどの記事において実名で登場しており、暴漢との乱闘の末に負傷したことが書かれる（国民新聞, 1905；都新聞, 1905；東京ニ六新聞, 1905；読売新聞, 1905）^{注8)}。徳富も自伝の中で、「日比野雷風なども、大なる棒を突き、「かねて先生の眷遇を忝くするから、御援助のために来た」と回想している（徳富, 1997, p.285.）。これをきっかけに日比野と徳富の「親交は生死を潜って愈々堅きもの」（日比野, 1932, p.55.）となり、その後の日比野の活動を支えていくこととなった^{注9)}。

その後も日比野の活躍は続く。日比野は1908年5月に「我日本固有の武術を以て其胆力を正大にし、其体軀を強健に」する目的のもと「大日本武術講習神刀館」を設立する（日比野, 1932, p.68.）。この計画は前年に構想されていたようで、1907年には、「武術学校建設の計画」があるために資金集めを目的として、「門弟二十余名」を連れて東北・北海道の各地を「遊歴」している（読売新聞, 1907；大野, 1976, p.96.）。この「遊歴」の範囲は海外まで至る。古林によれば、日比野は「明治三十六年以来日本内地は固より満朝地方に迄周遊を試み」た（古林, 1912, pp.725-726.）。そのきっかけとして、1908年3月29日に鳥居坂にある「韓国皇太子殿下」御用邸において行った演武が挙げられる（国民新聞, 1908a）。この演武がどのような経緯から成立したかは分からないが、その様子は新聞記事でも報道されており、日比野率いる神刀流一門の演武が好評であった様子を伝える（国民新聞, 1908b）。この演武が好評だったことと、それを踏まえた元帥陸軍大将である川村景明からの助言もあり、日比野は海外における剣武術演武の必要性を感じるようになり、演武の直後に渡韓を実施する（日比野, 1936, pp.105-113.）^{注10)}。

このような海外を含んだ「遊歴」を行いつつ、日比野は「大日本武術講習神刀館」の設立を目指した。「大日本武術講習神刀館」設立は、実態としては道場の拡張工事であったようで、多くの賛助者^{注11)}を得て「十一間に四間の大道場」が1911年11月28日に完成し、「東郷元帥、川村元帥、土方久元伯、森田悟由禅師、其他知名の来客の御出席」のもと、「徳富先生」の「開会の辞」と「東郷閣下の御発声にて」開会式が行われた（日比野, 1936, pp.114-121.）。この開館式については事前に新聞で報道されており（国民新聞, 1911a）、また当日の様子についても後日記事となっている（国民新聞, 1911b）。この開館

の前日には、元老の一人である松方正義の別邸にて「東宮殿下」の前で演武する機会も得ており（読売新聞, 1911；古林, 1912, pp.725-726.）、日比野はまさに八面六臂ともいえる活躍をした。道場が拡張された日比野と神刀流は、年号が大正となっても撃剣剣舞大会を定期的に開催し、神刀流の喧伝を続けた。

さらに、日比野は和尚号の許可を受ける。正明によれば日比野は、いつ頃からどういった経緯で縁が生まれたのかは不明であるが、それぞれ曹洞宗の僧侶である、永平寺 64 世貫主を務めた森田悟由、總持寺貫主 4 世を務めた石川素童、同じく總持寺貫主 5 世を務めた新井石禅らと交流があった。森田悟由は大日本武術講習神刀館設立の賛同者であり、石川素童は總持寺に現存する日比野の墓にある巨石の墓石を贈り、また自ら墓石正面に彫られている「天下無敵神刀流開祖日比野雷風居士之墓」の字を書いたという（日比野, 1936, pp.47-49.）。そして、特に交流があった新井石禅からは、1922 年 4 月 16 日に和尚号の許可を受けた。また和尚号許可に際して、東郷からは「無敵山雷風一喝和尚」の書をもっており、これを仏門としての名乗りとした（日比野, 1936, pp.47-52.；pp.131-132.）。その後、日比野は「無敵山雷風寺」の建立を目指していたが、1926 年 6 月 25 日に「腰部の腫物」が原因となり 63 歳でその生涯を閉じた（日比野, 1936, pp.132-133.）。

3. 小括

本章でみてきたように、武術家として大成した日比野ではあるが、その背景には多くの武術家たちが持ちえないような有力者たちとの人脈の力が存在した。どこでどう有力者たちとの交流が始まったのか所説あり、いずれもはっきりとしないが、しっかりと体制側との関係を構築している点が他の武術家との違いといえよう。確かに日清戦争により国粋主義が台頭し尚武の気風が高まり、さらに日露戦争の勝利という中でその時勢を味方にしたのではあるが、具体的に味方としたのは体制側の人々であり、彼らを積極的に撃剣剣舞大会へ招いていた。また注目すべきは、体制側でも軍人たちを中心とした政治家たちからの賛同を集めている点にある。そして、それらの人々は爵位をもつ人々が多く、すなわち華族であり貴族院議員の者、さらには伊藤、山縣、松方といった元老に列する者までいた。1900 年代は軍人政治家が多数登場する時代であるが（小田部, 2006, pp.117-139.）、そういった体制における中心的な人物たちとの関わりが、日比野を時の人としたことが伺われる。ただし、華族でも皇族関係者との接点はあまり見られない。また、警察組織を束ねる内務省関係者とのつながりはあまり見られず、管見の限り日比野（1936）に掲載される、

渡韓時に「韓国警視総監」であった丸山重俊から感謝状をもらった件が見いだせる程度である（日比野, 1936, pp.105-107）。

以上のように、武術興行がその数を減らす 1890 年代、日比野の実践がその流れに反し拡大した背景には、このような人脈が存在しており、彼らに対して積極的に剣武術を提示したことが挙げられる。東郷や土方といった元帥クラスの軍人たちを筆頭に、元老や首相、貴族院議員を含む華族、さらには皇太子からの支持も含め、1900 年代の政治や経済の中心を占めていた人々からの支援があるということは、それはすなわち、そういった人々の視線を意識し、それを剣武術に反映させざるを得なかったといえる。支持する人々が満足し、観客に対しても有益をもたらすと認められ、かつ娯楽としても受け入れられる。剣武術は、そんな条件を兼ね備えた武術である必要があったといえる。

III 撃剣家、舞う一神刀流剣武術とその実践

本章では神刀流剣武術の誕生からその実践を描く。2 章でみてきたように、神刀流は道場における稽古だけではなく撃剣剣舞大会という舞台上で演武を行うこと、すなわち芸能的性格を実践に含んでいる。日比野は、撃剣剣舞大会において「大和魂の実態及活動」を示そうとしていたが（東京朝日新聞, 1902c）、具体的にどんな実践を通じて人々に伝えていたのか。

冒頭で述べたように、「新派劇」の立役者である川上は、日清戦争を背景とした国粹主義が台頭する中で戦争劇により大衆からの支持を集めた。川上が大衆から支持を集めた理由として、従来の歌舞伎などの演劇にはなかった「演説口調の口立てぜりふ」や「身体所作」（兵藤, 2005, p.171.）、特にスピード感や視聴覚的效果が指摘される（神山, 2006, p.166.; 神山, 2009, p.211.）。同じく舞台上で行われていた武術興行において、そのような視聴覚効果はやはり重要な要素となりえたはずだ。では、どのような実践を提示していたのか。本章ではまず神刀流がどのように誕生したのかをみていき、後にその実態を描きたい。

1. 神刀流剣武術の誕生

古林によれば、日比野は「平素武士道の頹敗を慨嘆し、大に志気を鼓舞するの目的を以て剣法柔道居合三法を合して一の剣武術を工夫」した。これが「神刀流」であり、「剣武術は精神的教育として、志気振作武術鍛錬に資する」という（古林, 1912, p.725.）。このように、

神刀流は「武士道」や「士気振作」、「精神的教育」、または「大和魂」といった用語と共に語られる点は、同時代の武術と変わらない。

創始に至る経緯について正明は、大きなきっかけは1888年に行われた「開成学校（現帝国大学）」における「撃剣の会」にあったとする。日比野は、開成学校の学生に弟子がいたために「撃剣の会」に招かれ、「当時皇太子殿下御付武官たりし工兵杉山直彌」という人物と出会う。「杉山」は、当時の「剣道の墮せるを嘆じ」、「武士道精神の普及」と「墮せる日本武道の浄化」を日比野に託したという。そして、「杉山」は日比野に漢文学者である重野を紹介した。重野は、日比野に対して「文武無二道」の必要性を説いたという。重野によれば、「漢時代」から「文学の振興と共に剣舞も盛んに行われ」ており、「我國の剣道も支那の剣舞の型」から生まれたもので、「武道の淵源」は剣舞にあるという。日比野はこの「杉山」と重野の言を聞き、「古道の復興と精神体力の振興に努力すべきが自己の使命」と考え、「剣道より剣武術の創建」を目指すことになった（日比野, 1932, pp.39-42.）。

また内藤によれば、神刀流は日比野により「明治二十三（1890）年創案されたもの（括弧内は著者による補足）」であるという。内藤によれば、剣舞を勧めたのは「杉山」であった。「杉山」が剣舞を勧めた理由は、「今日の竹刀主義は」「単なる運動」であり、「之を以て精神修養の資に供することは不十分」であるためであったという。「剣法は気合が大切」であり、剣舞を通じて「詩を吟じて志気を振興し剣を振って決死の勇を鼓し敵中に切り込む」ような「気合」が習得できるのではないかと日比野に伝えたとされる（内藤, 1930, pp.9-10.）。

一方で、大野は前述した日比野（1932）の、神刀流創始のエピソードを示した上で、彼が聞いた二つの説を提示している。一つは、「近代剣舞は日比野正吉、長宗我部林馬（弥生流開祖、以下「長宗我部」と略す）などが院外団として秩父出身の壮士などと議会の控室につめている時退屈のあまり刀を抜いて（括弧内は著者による補足）」行ったもので、日比野が「日本舞踊」をやっていた愛人に振付させ誕生したものが神刀流であるというものだ。もう一つは、日比野が長宗我部の叔父である「川崎善三郎」から「剣道」と「土佐の剣舞」を習ったというものである（大野, 1976, pp.18-20.）^{注12}。すでに2章で触れているように、日比野の弟子である柳沢は、「新陰流」と柳沢の祖父が教えた「義太夫調」と舞から神刀流が誕生したと語っている。大野が示した二つの説からは、壮士的实践としての剣舞との関わりも伺えるが、いずれも検討する史料がないため提示のみとする。

以上のように、神刀流の創始には諸説ある。日比野の出自同様、神刀流自体もその成立にはっきりしない点が多い。ただ、少なくとも神刀流剣武術とは、日比野により 1890 年前後に創始された「志気振作武術鍛錬に資する」ことを目的としたもので、ただの武術でも「単なる運動」でもない。神刀流は、「剣法柔道居合三法を合して一」にしたものでありつつも漢詩^{注 13)}を吟じる剣舞の様式を取り入れた、「精神的教育」を含む武術として創始された。日比野が発行していた「目録」と「免許」には、神刀流の名称に続き「撃剣」「剣武術」「居合」の 3 つが併記されており、それら三つを一つの柱として実践されていた（日比野, 1932, pp.103-104.）。

では、剣武術とは何か。神刀流の名称については 1890 年前後から使用したと考えられるが、その当時は撃剣と剣舞の名称を使用している。例えば 1891 年の日比野による著作では撃剣の語を使用しているが、神刀流や剣舞については一切の使用がみられない。1895 年 8 月 19 日の新聞記事には「神刀流撃剣家」とあり、神刀流の名称が使用されていたことが分かる（読売新聞, 1895）。剣舞の使用は 1897 年からみられ、撃剣剣舞大会という名称や、1897 年の日比野による著作では剣舞という名称が用いられている（日比野, 1897）。しかし、翌 1898 年に出版された日比野の著作のタイトルでは、剣舞ではなく「剣舞術」が用いられており、明確に剣舞との違いが示される（日比野, 1898）。剣舞と剣舞術は何が違うのか。日比野は「所謂剣舞を見るに多く嫵媚態を成し絶えて骨力精神の寓」せず、「一時の快を酒間を取るへきも其技たる倡優妓女」が行うものと同程度であるという。そのために、日比野は「独創の剣舞に術の一字を加へ他の世間一般の剣舞と区別」したという（日比野, 1898, p.1.）。冒頭で述べたように、剣舞は「娘剣舞」のような「踊り」や、壮士たちが酒を飲み「悲憤慷慨」する壮士の実践として行われていた。こういった当時の「世間一般」が認識する剣舞の実態は、日比野が行う剣舞とは違うものであり、それ故に「術」という字を加えたという。その後、日比野は 1906 年頃から「舞」という字を「武」に変更し、神刀流剣武術とした^{注 14)}。

以上のように、神刀流剣武術とは「剣法柔道居合三法を合して一」としつつも、刀を手には漢詩を吟じる剣舞も実践に含み込むものである。ただし、その剣舞は当時「世間一般」で行われていた「所謂剣舞」ではない。あくまでも「武術鍛錬」の延長上に位置付けられるものであり、それ故に剣武術を名乗るのである。

2. 「決闘を観るの想い」—撃剣剣舞大会にみる神刀流剣武術の実践

では、神刀流剣武術の実践とはどのようなものであったか。

先述したように、神刀流剣武術は「剣法柔道居合三法」を合わせて誕生している。大野は、柳沢の言として「神刀館のケイコは明治四十年頃までは剣術が主であったが、その頃から剣術・剣舞改め剣武術の両道共盛んだった」と記している（大野, 1976, p.88.）。柳沢の発言のみではどのような稽古が行われていたのかは分からないが、Ⅱ章で述べたように、日比野自身が身に付けていたのは防具を身に付けて竹刀を用いる撃剣スタイルであり、1890～1905年あたりまでは新聞記事において「撃剣家」とされていることもあり、日露戦争前後までは主体が撃剣であった可能性が高い。

このような稽古を受けていた弟子についても触れておく。日比野は「熱心な者には無月謝にて剣舞を教授する」と新聞広告を出しているように（東京朝日新聞, 1901）、神刀館では無月謝による教授を行っており、またその年齢も「五歳から百歳まで」と幅広く（国民新聞, 1917b）^{注15}、性別も男女問わず募集しており、柳沢のような内弟子も取っていた（大野, 1976, p.74.）。弟子たちには当然のことながら軍人や政治家などのエリートも多くいたようであるが、他方では内藤のような町火消の息子であり神刀流を行いつつ柔拳興行でも鳴らしていた人物もいた。また、師範代を務めた大輪は帝大医学部の学生であったが身体が弱く帝大を中退しており、いわばエリート街道から外れた人物であった（大野, 1976, pp.106-107.: p.113.）。新聞記事にも女性芸者や壮士などが通っていたことが書かれており（東京朝日新聞, 1894；東京朝日新聞, 1900）、時期による違いを明らかにすることは出来ないが、幅広い年齢、社会層から神刀館に人が集まっていた様子がみられる。

次に、芸能的性格を最大限に発揮する演武の様子をみていきたい^{注16}。日比野は興行の際にしばしば「真剣試合」といった名称を冠し開催しているが、この「真剣」とは「所謂剣舞」と差別する意味で付されていたと考えられる。では、具体的にどう「真剣」であるのか。撃剣剣舞大会について詳細に記したものとして、1899年5月2日東京朝日新聞に掲載された記事「神刀流剣舞術を観る」がある。これは記事を書いた「隈水」なる人物が、1899年4月30日に神田錦輝館にて開催された「第六回大会」を実際に観に行き様子を綴ったもので、特に演武については詳細に記している。「第六回大会」は4月30日の「正午過ぎ」から開始された。その時点で「場内既に三分の二」は埋まっていた^{注17}。当日行われた剣舞術は「一番より始まり四十三番に終る。外に番外五六」行われた。出場したのは日比野をはじめ、師範代であった「大輪正秀、長島正道氏等外数十名にして、中には妙齡の童子もあり、紅顔の少年もあり、亦少女も」いた。「隈水」は剣舞について、言

葉では勇ましいことを言うものの、「其気合、人馬を斬倒すことはさておき、却て馬に踏倒されん情容」があると当初は考えていた。しかし、日比野の神刀流剣舞術は違っていた。「大に其趣を異に」するという神刀流剣舞術は、「其起仆進退、皆法あり、度あり。又剣法の形」であり、演武では「白刃を揮ふて相撃ち、剣火爛として飛散し、観者をして剣舞を観るにあらず、決闘を観るの想い」にするという。そのため、「其精采熟練、従前行はれし剣舞の遠く及ぶ所」ではなく、「是即ち剣舞と云はずして剣舞術と称する所以」であろうと述べる。では、「剣舞を観るにあらず、決闘を観るの想い」となる演武とはどのようなものであったか。「長島正道、石井正房二氏」による演武の様子をみていこう。彼らの演武した演目は、頼山陽の漢詩「過桜井駅趾（さくらいえきあとをすぐに）」（括弧内は著者による補足）であった。その詩内のある場面において、「二氏^{げんぜん}沄然」となり、また観客たちも「暗涙を含む」状態になったという。二人の演武は「奮戦健闘、両刃鋸の如く、石井氏の刀遂に折れ、満場の喝采屋瓦を震ふ」ほどであった（東京朝日新聞, 1899）。

このように「隈水」は、日比野をはじめとした神刀流一門の演武を高く評価する。撃剣剣舞大会において行われる神刀流剣術の演武とは、「決闘を観る」と思えるほどの演武であり、「剣火爛として飛散」し、「刃鋸の如く」ぶつかり合い「刀遂に折れ」、また演武者が「沄然」となると、観客たちも「暗涙を含む」演武であった。いわば、演武を観ることを通じ観客たちに演武者の感情的な機微をも浸透するような、そのような演武であった。

この演武の様子は「隈水」による誇張ではなかった。例えば、Ⅱ章で述べた 1908 年 3 月 28 日に行われた韓国皇太子面前において行った演武では、弟子の「沖正廣柳澤正春」の演武において「刀に火起り」、「大輪正秀氏正翁（日比野の弟子で日水館館長であった伊藤正翁のこと）」（括弧内は著者による補足）の演武では「二人の剣一度相打や刀忽ちに折れて満場の喝采」であったとい（国民新聞, 1908b）。刀を打合うことで火花が散る様子は、しばしば新聞上に描かれており（新愛知, 1910；国民新聞, 1911b）、比喩ではなく、観客を沸かすための視聴覚効果として行われていた可能性がみられる。また、刀を折ることが目的にあるわけではないのかもしれないが、それほどに打合うことも観客を驚かせ、盛り上げただろう。

以上のように、神刀流剣術とは、いわゆる壮士たちに行われていたような、刀を抜いて漢詩を独り吟じ悲憤慷慨するだけのものではない。単独で行うことも想定されている剣術であったが、同時に例え単独で演武を行っている場合でも不意に打込まれば対応す

のような実践であった。例えば、日比野は興行に際して観客らの前で剣武術について説明を行う際、弟子に演武をさせ、そこへ観客に打込ませ対応させていたという。また、「飛入勝手次第」という撃剣興行以来の形式も継承することで、常に市井の腕自慢たちからの挑戦も受けていた（大野, 1976, pp.84-85）。このように、あくまでも神刀流が一般に行われる剣舞とは違うことを、日比野は撃剣剣舞大会などの興行においても主張していた。そして、この主張を舞台上において実技で示すことは、観客を満足させるような視聴覚効果も生んでいたことが考えられる。

また、居合術も観客に対する視覚的効果を発揮していたと考えられる。そもそも居合術を見世物化した「居合抜き」は、近世中頃から見せ物小屋や路上の芸人たちが行っていたことで知られるが（古河, 1993, pp.67-68.：朝倉, 2002, pp.133-137.）、居合術の持つ芸能的性格に日比野は気付いていたと考えられる。先に述べたように撃剣剣舞大会では少年も参加する。彼らが演武において行う「丈より長き太刀を握っての居合」は観衆を驚かせていた（国民新聞, 1911b）。また、中でも日比野自身による居合術は葉書として売り出されるほど人気があったが、特に彼は「三尺五寸」とも「三尺六寸」（約 105～109cm）ともいわれる大太刀を用いた居合術を得意としていた（図 2）。

（※図 2 挿入）

この大太刀は漢学者根本通明から明治「三十五年四月」に譲り受けたもので（日比野, 1932, p.59.）、日比野はこの長大な太刀を用い、図 2 のように四肢を縛られた状態で抜刀できた。この技が行われるようになった時期は明確には分からないものの日露戦前後であり、彼を支持する「紳士」たちや東宮殿下、韓国皇太子らからも喝采を受けるような日比野の得意技となった（国民新聞, 1908b；国民新聞, 1911b；東京朝日新聞, 1912）。

そして、居合術を実践に含むことは撃剣を主体とするような興行と違い、刀をそこに登場させることになる。これまでみてきたように、刀はただそこに登場するだけではなく、実際に使用され、火花を散らし、時にその激しさと折れる。すでに 1870 年代後半頃には「凶器」と見做されていた刀は（尾脇, 2018, p.246.）、確かにまだ身近に存在していても、それを使用するような状況はほとんど無かったであろう。事実、日比野自身が日比谷事件で抜刀したことは、常軌を逸している行為であったのか、新聞記事のタイトルにされてもいる（東京朝日新聞, 1905b）。当時の人々にとって刀が登場する場面としては、舞台上で行われる今日でいう殺陣があった。しかし、当時の殺陣にあたるものは、歌舞伎におけるいちいち見得をきり、誰もいない空間に刀を振り下ろすスピード感のない演技で、打

ち合うようなことは行われていなかった（小川, 2007, pp.36-41.）。また、軍部においても刀の軍事的価値が高まるのは日露戦争後であり、それまでは日本刀やそれを用いる実践への馴染みは薄かった（坂上, 2018, p.28.）。しかし、そういった社会と刀の関係の中で、実際に火花を散らし折れる程に刀を打合う舞台上のやり取りは、常軌を逸した過剰な行為、いわば“狂気”とは映らず観客に受け入れられた。

3. 小括

本章では神刀流剣武術の成立過程やその実践についてみてきた。「剣法柔道居合三法」を合わせて誕生した神刀流はその実践に剣舞を含むものであったが、それは壮士たちが行っていたような剣舞ではない。まるで「決闘を観る」ような演武を行う剣武術は、撃剣剣舞大会で観客の視聴覚を通じて「大和魂の実態」を示した。

人々の日常から刀が遠ざかっていた明治時代後半において、過剰な演武は“狂気”と捉えられてもおかしくないとも考えられる。事実、日比谷事件における日比野の抜刀が問題視されたのは、抜刀という行為が“常識”から外れていたためであろう。しかし興行という、いわば“お約束”の中で示される抜刀した上での演武は、観客たちにとって許容できる範囲であったのであろう。“お約束”の中で「真剣さ」や「決闘を観る」気分を感じさせる演出が、火花を散らし刀が折れるほどの演武であったといえよう。これこそが、日比野が観客たちの視線を意識したうえで行った、神刀流剣武術の工夫といえよう。

兵藤は、川上らの戦争劇が「祝祭的な熱狂のなかで演じられる」ことで、「＜国民＞というイマジナリーな共同性に集団憑依された群衆を」作りだしたことを指摘する（兵藤, 2005, p.163.）。撃剣剣舞大会もまた、日清日露という対外戦争を背景とした国粋主義の台頭を下支えとした「祝祭的な熱狂」のなかで演じられ、そのような「群衆」を生み出していたと考えられる。戦争劇を支えたのは「演説口調の口立てぜりふ」であったが、漢詩文もまた明治時代に流行したものであり、日比野が活躍した 1890 年後半や 1910 年前後は流行期であり、「紳士」たちの「教養」でもあった。撃剣剣舞大会は、まさに「道徳性」と「娯楽性」が同位する「視聴覚形式」を十分に活かしており、他の武術興行が廃れていく中で多くの人々から喝采された。「志気振作」し「大和魂の実態」を感じさせ、かつ「低俗なイメージ」を抱かせないような「娯楽性」を兼ね備えた「真剣」な演武、それが「紳士」たちを含む観客の「視線」に適った神刀流剣武術の武術興行の姿であった。

IV まとめ

本稿では、明治期を中心に行われた武術興行の実践を明らかにしていくことで、同時期における多様な武術実践の一端を明らかにすることを目指した。具体的には、明治期中頃に日比野雷風により創始された神刀流剣武術の活動を追ってきた。

今日「舞台芸術」とされる剣舞であるが、先行研究にいわれるような撃剣興行の余興が拡大したという単純なものではなかった。興行という「見る/見られる」という関係性が生まれる場において武術を実践する中で、観客たちの視線に適うよう工夫されたものであった。冒頭で述べたように、武術興行に向けられた「視線」には様々なものもあり、場合によっては「暴力」行為の温床と見なされてもおかしくはない時代であった。日比野はそこに自身の持っていた人脈から、軍人を中心とした「紳士」たちを招き観覧させ、彼らを含む観客が納得する武術興行を実践していた。日比野による武術興行は、それまでの武術興行の観客にはいなかった「紳士」たちを引き込むことで、彼らの「視線」を意識し、武術、漢詩、大和魂といった要素を含ませ、人々の「視線」に適うものとした。

一方で、武徳会の目指す武術のあり方とは、やはり相いれないように考えられる。観る側、すなわち観客のあり方を武道概念の根本に置く武徳会にとって、「満場の喝采」が起きるような状況は到底認められなかったであろう。しかし、日比野に「紳士」たちの後ろ盾がある以上、直接的にも批判できない対象だったのではないかと考えられる。実際、武徳会と日比野の間に対立があったという証左はない。むしろ、警察組織と強いつながりがあった武徳会との棲み分けがあった可能性もある。この点は今後も検討したい。

「紳士」たちの直接的な言及がないため推論となるが、体制側からみれば日比野を通じた武術興行の“健全化”が為されたのかもしれない。腕力にものを言わすような、いわば新時代に馴染めないような人々が集まる武術興行ではあるが、他方では民衆の娯楽としても定着していた。彼らは大きな問題起こさないかもしれないが、そのような存在をどう扱うかは今日でも社会問題として存在する（知念, 2018）。そのような中で、「紳士」たちの意図を汲み、「大和魂」を鼓舞しつつ、時に町の腕自慢たちを観客の前で倒す日比野は、体制側からは好ましい存在であっただろう。しかし、Ⅱ章でみたように抜刀隊を組織するような行為、すなわち「暴力」となりうる様な行為は、例え「紳士」たちに気に入られた日比野でも許されないのである。あくまでも人々の「視線」が集まる舞台の上という、“お約束”の中で実践することが望まれた。

なお、日比野自身が神刀流剣武術にどういった意図を含み実践していたかについては、

紙面の都合もあり追及できなかったため、今後の課題としたい。

注

- 注1) 本稿では日比野の時代ごとの呼称に合わせて、剣舞、剣舞術、剣武術をそれぞれ使用していく。
- 注2) ただし、中村の指摘は史料的な根拠から示されているわけではない。また「舞台芸術」としているが、日本芸能史や演劇研究においても管見の限りにおいて扱われてはいない。また、「余興」と中村が述べるように、あくまでも武術とは別ものであるという認識が垣間見られる。
- 注3) 内藤様に他の弟子たちも著作を残しているが、管見の限り、内藤以外の弟子たちは日比野の詳細については記していない。
- 注4) 大野によれば、日比野は「鳩山の選挙の時、選挙仇である革新派の角田新平」の壮士と乱闘になったという（大野, 1976, pp.77-80.）。「角田新平」とは、政治家で立憲革新党の角田真平のことだと思われる。この時に角田側は「壮士二百余名」を、鳩山側は「榊原健吉氏に依頼して剣客二十余名を雇入れ」乱闘になった（東京朝日新聞, 1891）。なお、日比野が「榊原健吉」に招集されたのかどうかは不明である。
- 注5) 記事内に登場する壮士が所属していたのが「本郷区湯島天神町三丁目一番地の武術指南所神刀館」であったという。
- 注6) 正明によれば、日比野は日露戦争時に出征している門人から「抜刀隊」の重要性を説いた書簡をもらったようで、このことも抜刀隊結成と関連するかと考えられる（日比野, 1932, pp.52-53）。
- 注7) 例えば、「陸軍士官学校」卒業生の送別会や（東京朝日新聞, 1904d）、「渋谷分院娛樂室会場式」（東京朝日新聞, 1905a）などで演武を行っている。なお、「渋谷分院」の演武に対して、当時の院長であった「医学博士保利真直氏」からの感謝文と送られた漢詩が正明の著作に掲載されている（日比野, 1932, pp.50-51.）。
- 注8) 東京朝日新聞にも「民友社員某といえる大兵男」が暴れたことが書かれているが、この時に怪我した部位が他の新聞においても書かれている日比野の怪我の部位と同様であることから、この「民友社員某」が日比野かと推測される（東京朝日新聞, 1905b）。
- 注9) 日比野と徳富の交流は日比谷事件以前もあり、例えば 1902 年の日比野の著作は、徳富が序文を書いている。また、曹洞宗大本山の一つである總持寺に現存する巨岩を用

いた日比野の墓石の裏側には、徳富による碑銘文が記されている。大野が日比野の弟子である清水正寅から聞いた話によると、徳富は日比谷事件の件で日比野に恩義を感じ、日比野が没するまで「毎月一千円づつ」神刀館に寄付を行っていたという（大野, 1976, p.83.）。このことの真偽は不明ではあるものの、一定以上の交友関係があったことは間違いないであろう。

注10) この渡韓がいつ頃行われたか正確な日程は不明ながら、「韓国警視總監丸山重俊」からの演武への感謝状に 1908 年 5 月 28 日とあるため、渡韓は少なくとも韓国皇太子面前で演武を行った 1908 年 3 月 30 日以降 5 月下旬までに行っている。その後も 1910 年 8 月 25 日に「臨時韓国派遣隊司令官陸軍少将渡邊水哉」から演武への感謝状をもらっていることから、回数は不明であるが断続的に渡韓している（日比野, 1936, pp.105-113.）。

注11) 賛同者の内訳は元老 2 名、軍人（将校）が陸軍 18 名、海軍 8 名、その他大臣や総督、華族などが 19 名の合計 47 名が賛同している。具体的な人物をみていくと、元老は伊藤博文と山縣有朋、軍人は東郷や川村、伊東祐亨をはじめ、内閣総理大臣となる桂太郎、寺内正毅などが、さらに韓国で大臣を務めた趙重応、李載崑、財閥の三井・澁澤も賛同している。また、特筆すべきは 47 名中 32 名が爵位を持っている点であり、華族に列する人々である。

注12) ただし、大野の説には登場人物たちの背景に疑問が残る。例えば、日比野は「愛媛県令であった」関新平の書生だったとあるが、1888 年には関新平は死亡しているため年号が合わない（大野, 1976, p.18.）。

注13) 漢詩文は明治期に数回の流行があったこと（色川, 2007, pp.141-142.）、明治期の軍人たちの文学的教養であったこと（前田, 2006, p.215.）が指摘されている。

注14) 日比野は剣武術とした理由について明確に語らないものの、あくまでも武術の延長に剣舞術を位置付ける発言をしており、それ故に剣武術としたことが伺われる（日比野, 1906）。

注15) また、「少年剣士四百余名」による「武士道鼓吹のため」の行軍と演武を行ったことも記事としてあり、多数の年少者が稽古にきていた様子も伺われる（国民新聞, 1917a）。

注16) 日比野の興行が、興行としてどれくらいの金額を取っていたのかについては、管見の限りにおいて史料がないため正確には分らない。ただ、柳沢の言によれば「日露役後、三年間地方を廻った」とときには「入場料 五十銭」とっており、「大金であったがい

つも満員の盛況であった」という（大野, 1976, pp.84-85.）。推測の域を出ないが、「紳士」たちは来賓として招き、その他の観客からは入場料を取っていたのではないだろうか。

注17) 神田錦輝館の収容人数については、管見の限り記録がないために正確な数は不明ながら、錦輝館にて行われた集会等の新聞記事には、最大で「聴衆無慮三千余名」（東京朝日新聞, 1895a）、それ以外にも「聴衆無慮二千五百名」（東京朝日新聞, 1892b）、「聴衆二千近く」（東京朝日新聞, 1892a）とあり、2000～3000 人は収容できたようである。

文献

- 安達吟光（1898）『第五回神刀館大会剣舞術真剣試合之図』，福田初次郎。
- 赤坂憲雄（1985）異人論序説．筑摩書房．
- 朝倉無声（2002）見世物研究．筑摩書房．
- 知念渉（2018）〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー ヤンキーの生活世界を描き出す．青弓社．
- エイコ・マルコ・シナワ（2020）悪党・ヤクザ・ナショナリスト 近代日本の暴力政治．朝日新聞出版．
- 藤野裕子（2015）都市と暴動の民衆史—東京・1905-1923—．有志舎．
- 古林亀治郎（1912）現代人名辞典．中央通信社．
- 古河三樹（1993）図説 庶民芸能—江戸の見世物．雄山閣．
- 長谷川昇（1977）博徒と自由民権 名古屋事件始末記．中央公論社．
- 日比野正明（1932）日比野雷風傳．心劍會．
- 日比野正明（1936）心劍に生きる 日比野雷風．心劍會．
- 日比野正吉（1891）撃剣教育論．神刀館．
- 日比野正吉（1897）剣舞図解教範：神刀流独習．魁真楼．
- 日比野正吉（1898）剣舞術教範．博文館．
- 日比野雷風（1902）天下無敵 剣舞術．學友館書房．
- 日比野雷風（1906）武道根本 剣武術．東京博文館．
- 兵藤裕己（2005）演じられた近代 <国民>の身体とパフォーマンス．岩波書店．
- 平出鏗二郎（1975）東京風俗志．八坂書房．
- 池本淳一（2014）嘉納健治の「柔拳興行」と日本ボクシング史におけるその位置づけ．体育

- 学研究, 59: 529-547.
- 井上俊（2004）武道の誕生. 吉川弘文館.
- 石井研堂（1997）明治事物起源 7. 筑摩書房.
- 色川大吉（2007）明治の文化. 岩波書店.
- 加藤秀俊（1965）見世物からテレビへ. 岩波書店.
- 神山彰（2006）近代演劇の来歴. 森和社.
- 神山彰（2009）近代演劇の水脈—歌舞伎と新劇の間. 森和社.
- 国民新聞（1905）9月6日「暴徒撃退始末」.
- 国民新聞（1908a）3月31日「韓皇儲剣武御覧」.
- 国民新聞（1908b）11月「韓皇儲剣武御覧 日比野雷風一門の光栄」.
- 国民新聞（1911a）11月27日「神刀館道場開き 朝野諸名士の臨席」.
- 国民新聞（1911b）11月30日「神刀館の道場開き 目覚ましき居合振り」.
- 国民新聞（1917a）4月15日「少年剣士の行軍」.
- 国民新聞（1917b）4月17日.
- 木本玲一（2018）拳の近代 明治・大正・昭和のボクシング. 現代書館.
- 木村直恵（1998）＜青年＞の誕生. 新曜社.
- 小松和彦（1985）異人論 民俗社会の心性. 青土社.
- 前田愛（2006）幻景の明治. 岩波書店.
- 鈎逢賀（2020）剣舞入門 “今に生きる” サムライ” の美. 青幻舎.
- 都新聞（1896）11月28日「剣客の葛藤」
- 都新聞（1897）5月2日都新聞
- 都新聞（1905）9月6日「『国民新聞』の襲撃」
- 中嶋哲也（2017）近代日本の武道論——武道のスポーツ化問題の誕生. 国書刊行会.
- 中村民雄（1994）剣道事典—技術と文化の歴史—. 島津書房.
- 中野正昭（2020）政治メディアとしての演劇 川上音二郎、大衆演劇、裸ショウ. 神山彰編,
演劇とメディアの20世紀 近代日本演劇の記憶と文化 8. 森話社, pp.300-338.
- 内藤正光（1930）心身鍛錬通信教授 神刀流剣武術. 神刀流神刀館本部大日本精神会本部.
- 西久保弘道（1912）武道. 福島県教育会.
- 小田部雄次（2006）華族—近代日本貴族の虚像と実像—. 中央公論新社.
- 小川順子（2007）「殺陣」という文化 チャンバラ時代劇映画を探る. 世界思想社.

- 大野正一（1976）剣舞の歴史. 私家版.
- 大阪毎日新聞（1903）12月12日
- 尾脇秀和（2018）刀の明治維新 「帯刀」は武士の特権か？. 吉川弘文館.
- 坂上康博（2018）日露戦中・戦後の大日本武徳会一戦時下の動態、武術事業の変化と「剣道」「柔道」への名称変更、イデオロギー的機能―. 一橋大学スポーツ研究, 37: 21-35.
- 寒川恒夫（2014）日本武道と東洋思想. 平凡社.
- 新愛知（1910）4月13日.
- 田邊元（2013）「芸能武術」論序説：長谷川流棒術と田山花踊りの「棒振り」を事例として. スポーツ人類学研究, 15: pp.45-66.
- 田邊元（2017）村落における武術伝承組織の検討：神道香取流を事例として. 体育学研究, 62(2): pp.631-646.
- 田邊元（2020）「北陸地方の百足獅子」調査報告書：その今日の実践について. スポーツ人類学研究, 22: pp.63-74.
- 徳富蘇峰（1997）蘇峰自伝. 日本図書センター.
- 東京朝日新聞（1891）3月18日.
- 東京朝日新聞（1892a）5月21日「院外民党演説会の模様」.
- 東京朝日新聞（1892b）6月28日「自由党政談演説会」.
- 東京朝日新聞（1894）8月8日「本郷四丁目の兄殺し（つづき）」.
- 東京朝日新聞（1895a）7月18日「同志政談大演説会」.
- 東京朝日新聞（1895b）9月20日「武術講習会」.
- 東京朝日新聞（1897）5月1日「撃剣剣舞大会」.
- 東京朝日新聞（1898）4月17日.
- 東京朝日新聞（1899）5月2日「神刀流剣舞術を観る」.
- 東京朝日新聞（1900a）10月6日「剣舞芸者人を傷く」.
- 東京朝日新聞（1900b）11月23日「恤兵義金募集の剣舞会」.
- 東京朝日新聞（1901a）10月26日「神刀館道場の落成」.
- 東京朝日新聞（1901b）11月29日「錦輝館の剣舞」.
- 東京朝日新聞（1902a）9月2日.
- 東京朝日新聞（1902b）10月16日朝刊「神刀流剣舞術大会」.
- 東京朝日新聞（1902c）10月17「天下無敵神刀流剣舞術第十七回大会」.

- 東京朝日新聞（1903）4月19日．
- 東京朝日新聞（1904a）2月14日「（広告）神刀流開祖天下無敵 日比野雷風」．
- 東京朝日新聞（1904b）2月25日「公私の美挙」．
- 東京朝日新聞（1904c）10月14日「撃剣剣武術の奉納」．
- 東京朝日新聞（1904d）12月28日「士官候補生の送別会」．
- 東京朝日新聞（1905a）3月28日「渋谷分院娛樂室開場式」．
- 東京朝日新聞（1905b）9月6日「『国民新聞』社の惨状（民友社員抜剣、負傷者数名）」．
- 東京朝日新聞（1912）5月31日「上村將軍の御機嫌」．
- 東京日日新聞（1895）8月18日「神刀館、柳原河岸に道場を新設」．
- 東京ニ六新聞（1905）9月6日「『国民新聞』社襲わる」．
- 魚住孝至（2021）日本の伝統文化シリーズ6 武道．山川出版社．
- 山口昌男（2000）文化と両義性．岩波書店．
- 山口昌男（2013）文化記号論研究における「異化」の概念．山口昌男・今福龍太，山口昌男
コレクション．筑摩書房：pp.497-540．
- 湯浅晃（2000）自由民権運動と武術についての一考察．武道学研究, 32(2): 1-13．
- 湯浅晃（2003）自由民権運動と剣術，財団法人全日本剣道連盟 編，剣道の歴史，財団法人全
日本剣道連盟，pp.166-178．
- 横山源之助（1967）明治文学全集 96 明治記録文学集．筑摩書房．
- 読売新聞（1895）8月19日「神刀流撃剣場」．
- 読売新聞（1902）10月17日「神刀流剣舞術会」．
- 読売新聞（1905）9月6日「『国民新聞』社破壊さる」．
- 読売新聞（1907）7月30日「日比野雷風氏（剣客）」．
- 読売新聞（1911）11月27日「東宮殿下の御清興」．

図 1. 安達吟光（1898）『第五回神刀館大会剣舞術真剣試合之図』（著者蔵）。舞台上右奥で座る人物が日比野。正面に対して両側の客席には「紳士」らが座る。

図 2. 日比野雷風の葉書（年代不明、著者蔵）。手足を縛った状態で抜刀出来ずことを示している。